

終活

ライター：萱野史奈、小俣芹夏、猪俣ひろか、土肥野秀尚、大友有人、川口光、

Andrew Upton

エディター：萱野史奈

「あなたは今日死ぬかもしれませんよ」

死期が迫った約90人の前で終活カウンセラー協会の代表理事である武藤頼胡さんは、このようにスピーチをはじめめる。

終活カウンセラー協会は、相続などに関するセミナーを開催している法人団体だ。

近年、日本では「終活」という動きが大きな広がりを見せている。これは、「人生の終わりのための活動」の略であり、残りの人生をよりよいものにする活動だ。よりよい最期を迎えるため、また残された家族を困らせないために、葬儀や相続、墓などを自身が元気なうちに準備する。現在では、数多くの終活セミナーやフェアが催され、驚いたことに入棺体験や遺影撮影なども行われるそうだ。

「「終活」とは英語に直すと何ですか。」

海外向け番組のディレクターに聞かれ、武藤氏は次のように答える。

「ローマ字”shukatsu”でお願いします。」

このように武藤氏が強く念を押すのは、終活を日本独自のものだと考えるからだ。

「終活は宗教観とは別。1人ひとつの命があるのだから、これからをみんなで考えていこうよ、というものなんです。」

家に神棚と仏壇があって、クリスマスにはケーキを食べお祝いする、宗教観がない日本だからこそ、終活というものが生まれたのかもしれない。武藤氏が終活を英語に直さなかったのは、宗教観等が意味合いに含まれるのを避ける狙いもあったという。

ある中学2年の少女は終活関連の職をもつ母を手伝いたくセミナーに通い始めたそうだ。彼女の学ぶ姿勢は真剣そのものだという。大学生や20代の若い世代も多く受講しにくるとも武藤氏は話す。終活の幅は今や、年配層だけには収まりきらない。

しかしながら、相談で一番多い客層は、やはり年配層であり、2014年における相談はダントツで墓に関することだった、と武藤氏は振り返る。死が迫った人々の多くは、相談・準備をすることで自身の死後への不安を払しょくしているようだ。

「今日来てよかったです。」

武藤氏の銀行での講演会のあと、寡黙そうな70代男性が一瞬で涙を流し、こう話した。

彼は12年前に妻を亡くし、講演会の日まで自分が生きているのか死んでいるのかわからない状態だったという。しかし、講演会で彼はこれからの人生への甲斐を見つけたよう

だった。武藤氏の講演会へ来てもらった人には生きる甲斐を見つけて帰ってほしい、という一番のモットーが伝わったのだろう。

大学で就職活動のゼミ講師も務める彼女は、学生に終活でも行う人生の棚卸をしてもらっていると語る。人生の棚卸とは「今の自分はどういうことで出来てきたのか」を知り、これからの時間をよりよくするための最初のステップだという。自分のいままでを振り返った翌日、学生は「ありがとうのプレゼンテーション」を行う。そこでは、両親や家族への感謝の気持ちを皆が真剣に述べるそうだ。このように、これまでの人生を振り返ることで、学生たちはより自分を理解することができ、また自分をずっと大切に思えるようになるようだ。墓や相続について考える終活は学生にとってまだまだ程遠い存在に思えるが、人生の棚卸という点では共有しうるものがあるのではないか。終活は相続や墓地の問題を越え、人々に生きる甲斐や感謝の気持ちも与えるようだ。